



目標

- 比喩の表現について理解して、描かれている内容を想像する。
- 場面と場面、場面と人物などの描写を結び付けて、作品を読み深める。

星の花が降るころに

あんど
安東 みきえ

ぎんもくせい

銀木犀の花は甘い香りで、白く小さな星の形をしている。そして雪が降るように音もなく落ちてくる。去年の秋、夏実と二人で木の真下に立ち、花が散るのを長いこと見上げていた。気がつくと、地面が白い星形でいっぱいになっていた。これじゃふめない、これじゃもう動けない、と夏実は幹に体を寄せ、二人で木に閉じ込められた、そう言って笑った。

銀木犀 モクセイ

イ科の常緑小高木。秋に白い小花を多数咲かせ、強い香りを放つ。



——ガタン！

びっくりした。去年のことをぼんやり思い出していたら、机にいきなり戸部君がぶつかってきた。戸部君は振り返ると、後ろの男子に向かってどなった。

「やめろよ。押すなよなあ。俺がわざとぶつかったみたいだろ。」

自習時間が終わり、昼休みに入った教室はがやがやしていた。

私は戸部君をにらんだ。

「なんか用？」

「宿題をきこうと思って来たんだよ。そしたらあいつらがいきなり押してきて。」

戸部君はサッカー部のだれかといつもふざけてじゃれ合っている。そしてちょっとしたこづき合いが高じてすぐに本気のけんかになる。わけがわからない。

高じる 意

漢

押

(オウ)
おす
おさえる

押^お
す

漢

俺

おれ

俺^{おれ}

塾のプリントを、戸部君は私の前に差し出した。

「この問題わかんねえんだよ。『あたかも』という言葉を使って文章を作りなさい、だって。おまえ得意だろ、こういうの。」

私だってわからない。いっしょだった小学生のころからわからないままだ。なんで戸部君はいつも私にからんでくるのか。なんで同じ塾に入ってくるのか。なんでサッカー部なのに先輩のように格好よくないのか。

「わかんないよ。そんなの自分で考えなよ。」

隣の教室の授業も終わったらしく、椅子を引く音がガタ

ガタと聞こえてきた。私は戸部君を押しつけるようにして立ち上がると廊下に向かった。

戸部君に関わり合っている暇はない。今日こそは仲直りをする決めてきたのだ。はられたポスターや掲示けいじを眺めるふりしながら、廊下で夏実が出てくるのを待った。

漢 塾 ジュク

塾 ジュク

漢 輩 ハイ

先輩 パイ

漢 廊 ロウ

廊下 ロウ

漢 眺 チョウ
ながめる

眺め ながめる

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。だから春の間はクラスが違っても必ずいっしょに帰っていた。それなのに、何度か小さな擦れ違いや誤解が重なるうち、別々に帰るようになってしまった。おたがいに意地を張っていたのかもしれない。

お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそっとなでた。中には銀木犀の花が入っている。もう香りはなくなくなっているけれどもかまわない。去年の秋、この花で何か手作りに挑戦しようと言ってそのままになっていた。香水はもう無理でも試しにせっけんを作ってみよう、そし

て秋になったら新しい花を拾って、それでポプリなんかも作ってみよう……そう誘ってみるつもりだった。夏実だつて、私から言いだすのをきっと待っているはずだ。

誤解 意

意地を張る 意

漢

挑

チヨウ
いどむ

チヨウ
挑戦

訓

香水（コウスイ）

漢

誘

ユウ
さそう

さそ
誘う

ポプリ

ほうこう
芳香

のある草花を乾かん

そう
燥させたもの。

香りを楽しむた

めに、袋などに

つめて用いる。

夏実の姿が目に入った。教室を出てこちらに向かってくる。

そのとたん、私は自分の心臓がどこにあるのかがはっきりわかった。どきどき鳴る胸をなだめるように一つ息を吸ってはくと、ぎこちなく足をふみ出した。

「あの、夏実——」

私が声をかけたのと、隣のクラスの子が夏実に話しかけたのが同時だった。夏



実は一瞬とまどったような顔でこちらを見た後、隣の子に何か答えながら私からずっと顔を背けた。そして目の前を通り過ぎて行ってしまった。音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

騒々しさがやっと耳に戻ったとき、教室の中の戸部君がこちらを見ていることに気づいた。私はきつとひどい顔を

なだめる **意**

とまどう **文**

訓 背ける (そむける)

漢 騒
ソウ
さわぐ

騒々しさ
ソウ

109-2

108-4

B5判 22P 国語1年